

編集委員が 行く

「やきとりの名門」を支える

～福井の食産業と就労支援～

山陽新聞社会事業団専務理事 阪本文雄



●特集● 食と障害者雇用

取材先データ

株式会社 秋吉グループ本部

〒919-0321 福井県福井市下河北町5-30
TEL 0776-38-5000(代) FAX 0776-38-5050
<http://www.akiyoshi.co.jp/>

■1959(昭和34)年創業。福井27店、石川16店、富山14店、大阪・京都・滋賀・兵庫30店、東京11店など全国で焼き鳥店を展開、年商150億円。本社は事務、生産部門で300人。

社会福祉法人 足羽福祉会

〒910-2178 福井県福井市柵野町20-7
TEL 0776-41-3108 FAX 0776-41-3199

■「あすわ就労支援センター」
「足羽ワークセンター」は自立訓練(生活訓練)・就労継続支援B型事業所、「足羽サポートセンター」は就労移行支援・就労継続支援B型事業所、「パステル」は自立訓練(生活訓練)・就労継続支援B型事業所、「スマイル」は生活介護を行う。そのほか法人には、障害児入所施設、相談支援センター、地域生活支援センター、児童発達支援センター、介護老人福祉施設、保育園などを運営。

有限会社 C・ネットサービス

〒919-0321 福井県福井市下河北町11-15-1
TEL 0776-38-5757 FAX 0776-38-5760

■2003(平成15)年創業。社会福祉法人コミュニティネットワークふくい(C・ネットふくい)からクリーニング部門と容器・パット洗浄事業を移管し、2012年3月に障害者福祉サービス事業所を開設。就労継続支援A型事業所を行う。



編集委員から

障害者雇用は年々数字が伸びている。企業の理解が進み、福祉制度の充実、障害者を送り出す就労支援施設の支援の質的向上が大きな要因だろう。今回取材した足羽福祉会は障害者雇用の大きな課題である職場定着に正面から取り組み、支援サービスの質の高さを感じた。またC・ネットふくいのA型事業所は持続可能なモデルとしての会社化という取組みも先駆的と感じた。その上に企業との雇用の地域連携があった。

(写真) 小山博孝

Keyword : 身体障害、知的障害、就労継続支援A型・B型事業所、飲食業、キャリアアップ、ジョブコーチ



全国展開する「秋吉」(福井駅前店)

POINT

- ① 職場定着までのきめ細かい支援
- ② 利益をあげ社会に貢献
- ③ アフターケアでも重要な役割を果たすジョブコーチ

やきとりの名門

福井駅前へ出ると、横断歩道を渡った真ん前に「やきとりの名門秋吉」がある。「いらっしやいませ」大きな声で迎えてくれた。炭火が燃え上がり、いい匂いがする。純けい(雌親鶏)、若どり、ねぎま、若皮、ささみ、みの、タン、砂ぎも、豚ロースとメニューは豊富。6時前に入っただが、サラリーマンや家族連れであつという間に満席になった。冷えたビールと焼き鳥は相性抜群、うまかった。

翌朝9時半、本社を訪れた。2013(平

成25)年に完成したガラス張りのしゃれた外観。事務所であいさつ、片岡常男社長、清水日登美常務、島川勝典取締役製造本部長らが応接してくれた。

「社員300人で12人の障害者が就労し、雇用率は十分に達成しています。全員が焼き鳥をつくる製造現場。勤続42年のベテランから10代で入社して勤続5年の若者まで、平均年齢は40歳ぐらい、みんなうちの戦力になっています」と片岡社長。

障害者雇用にも本格的に取り組んだのは20年前。養護学校、障害者授産施設などから、「障害者が働く仕事はないか、雇用の受け入れを考えてほしい」と要請があった。片岡社長、清水常務らが検討して社



清水日登美常務取締役



片岡常男代表取締役社長

内の製造工程の中で、向いた作業を洗い出し、養護学校、ハローワーク、障害者職業センターなど障害者就労支援のネットワークに入り、入社受け入れ後の人間関係など問題点を勉強した。

その段階で、障害者の就労について作業訓練、求職登録、就職活動、相談・体験実習、職場適応援助という一連の専門能力を持つ社会福祉法人足羽福祉会、社会福祉法人コミュニティネットワークふくい(以下C・ネットふくい)を知り、具体化。実習、トライアル雇用、そして一般就労へと進んでいった。「うちは、現場がすべて。本人が現場に慣れ、まわりの人たちが受け入れれば、それでOK。また、ご両親の対応が大事だと学びまし



秋吉グループ本部



「切り場」と呼ばれる作業場で活躍する小林薫さん



清潔感あふれる秋吉の工場内



た」と片岡社長。
社長を先頭にした20年の障害者雇用の蓄積で、障害者の受入れは、施設内にジョブコーチがいて職場定着まできめ細かい支援ができる足羽サポートセンターがある足羽福祉会に選ばれていた。本社から80メートルに隣接する有限会社C・ネットサービスに、焼き鳥屋の店員が着る店用の制服、エプロン、作業着などのクリーニング、焼き鳥を入れるバット（ト

レー）の洗浄を外部委託した。
「2つの専門高度な就労支援施設と連携し、親の会、福井障害者職業センターの協力を得て安定しました。いろいろ試行錯誤はありましたが、いまのかたちが最善だと思っている」と片岡社長は話した。地域の社会資源としての就労支援施設とうまく連携し、結果的には障害者の働く場の拡大につながっている。
スピード感ある現場で
障害者が働く生産現場を見せてもらった。温度、空気などの管理が万全に行われ、清潔感あふれる。鶏肉を皮、もも、さもなど小さなサイズにカットする切り場、それを1本ずつ串に刺していく刺し場、ラップをかけるラップ室、開梱から出荷までの作業現場で身体障害者2人、知的障害10人、20代から60代まできびきび作業していた。
切り場で台車を押して切り分ける肉を配達して回る小林薫さんは24歳。足羽ワークセンターで訓練を受け就労、もう5年になる。「包丁を持って作業しているなかですから、人に当たらないように注意しています。最初はプレッシャーがあり緊張しました。足羽福祉会のジョブコーチなどの方々に支えてもらい、助かりまし



ラップ室で働く才場俊治さん。勤続15年になる

た。いまは落ち着いています。この会社に入ってよかった」。車の免許を取り自宅からのマイカー通勤が将来の目標。カラオケが楽しみという。
才場俊治さん（39歳）は、刺し場で串になった焼き鳥にラップをかけるラップ室勤務。機械がきちんとラップをかけているか、流れ作業の中でチェックする。「同僚と気を合わせ、パツパツとしないといけない」



出荷場で確認作業をする
田嶋靖士さん

勤続15年、39歳。グループホームから送迎バスで通勤、音楽を聴くのが好き。

田嶋靖士さんは29歳、勤続12年、出荷場で積込みに精を出していた。箱に入った焼き鳥を、9時に富山、11時に金沢と方面別時刻表に合わせて仕分けし、積み込む。「トラックで陸送、また飛行機便で全国へ送り出しています」と教えてくれた。

生ものを扱う生産現場だけあって、鮮度を落としてはならず、時間との闘いでスピード感があり、作業場は無言。緊張感もある職場で、3人ともそのなかに溶け込んで仕事に打ち込んでいた。

「お客さんが来る店では、800度の炭火でさっと焼く職人技が求められるが、生産現場では串の刺し方も熟練工が1本ずつ手作業です。すべてわが社の人材の力が1本の串になって商売が成り立っています。障害のある方々もがんばっています」と島川製造本部長は話す。

有限会社 C・ネットサービス

翌朝8時前、有限会社C・ネットサービスを訪ねた。「おはようございます」と出勤してきた若者の元気い声が事務所に響く。「おうっ、今日も元気やなあ」サービス管理責任者の萩原義文取締役が笑顔で答える。従業員は20代から50代、知的、発達、精神障害の24人。

8時半始業。クリーニング工場は女性



有限会社C・ネットサービス



が多い。洗う、乾燥、プレス、たたむなど一連の作業があり、大型洗濯機、プレス台がならぶ。店長という文字の入った店用の白衣、注文を取る接客の女性用の赤い制服、エプロンなどがきれいに洗濯して仕上がり、富山便、石川便、大阪便など方面別に箱入れして送り出す。道鎮幹夫さんは51歳。29歳で入社して、いまは班長として仕事の流れに目配りする立場。「自宅通勤していたが、両親が亡くなりグループホームに入った。ビールを飲んで仕事の疲れをいやす」という。1日6時間勤務、月給は11〜12万円。趣味は絵を描くこと。玄関の会社案内の掲示板に彼の作品が展示されている。青、赤、グレイ、色彩豊かに抽象的なアートは人柄か、ほのぼのとした感じがよかった。

12時半、午前中3時間の勤務が終わった。クリーニング班長は仕事が終わると、掃除がきちんとできているかチェック、電源を落とし、戸締りをする。「責任があります」とまじめな管理職の顔になった。

バット洗浄場。がちやがちや、がーん。バットは生の焼き鳥を入れるアルミ容器なので、大きな音が耳に響く。全員が白い帽子、赤いかぶりのエプロンに安全靴、ビニールの手袋を身に付け、ふたと箱部分に分けて蒸気の洗浄機にかける。バットにこびりついた肉片は手作業で落とす。30分もすると汗が出る人も。ここは男の職場だ。洗浄が仕上がると、クリンルームでマスクをして出荷作業。積み込む車もクリーンカー、同僚の障害者がドラ



C・ネットサービスのクリーニング工場。「秋吉」の作業着、エプロン等が洗濯され、仕上がっていく。白衣をプレス機にかける道鎮幹夫さん



バット洗浄場、笑顔で仕事を進める松永康明さん

イバーになり、80メートル離れた秋吉本社へ運び納入。ここで働く重度知的障害者の松永康明さんは42歳。「仕事は難しくない。18歳から働いており、家族がみんな働いているのを見て育ったので、働くイコール生きることだと思っている」と。月給は10〜11万円。電車が好きで、毎日寮と実家を往復している。

障害者を主任・班長に

3年前、このクリーニング・バット洗浄を含め2つの事業を有限会社化した。仕事は原則、障害者を中心にしたため、勤務経験の長い障害者を主任、班長にし、24人いた職員を4人にした。私が見たとき、本社のクリーニング・バット洗浄は職員1人だった。

勤務体系は能力、経験などで作業時間、手当などを細かく決めた。萩原取締役は岡山市の旭川荘で物品販売、食堂、清掃などを行う重度障害者多数雇用事業所の有限会社トモニの専務としての実績を持ち、松永正昭社長のもとで会社化を実現した。「職員の数は少なくともポイントだけおさえておけば、仕事は進んでいきます。依存心がなくなり、主任、班長で

輪ができ、結構やれるんだと感心して「ます」と萩原取締役。

この方針を打ち出した社長の松永氏は「国の財政を考えると福祉予算がこれ以上増大すると将来はもたない。A型事業所はいい発想だが、経営力が求められ、近い将来、淘汰されるときが来ると思う。私はA型事業所の持続可能な制度として会社組織がよいと考え、納税もする有限会社にした」と話す。C・ネットふくいの経営理念は、「研究と創造につとめ時流に先んずる」、「責任ある判断と行動のもとに最善をつくす」、「より豊かな社会づくりに貢献する」。親の会活動から社会福祉法人の運営に50年間、無休・無給で取り組んできた松永氏の真骨頂が有限会社社にうかがえる。すでに全国の就労支援施設関係者などに注目されている。「障害の重い人は国の福祉制度の恩恵を受ければよいが、働ける障害者は働き、会社が利益をあげ、納税すれば、社会に貢献できる」と松永氏は考える。

あすわ就労支援センター

福井市^{ふか}野町、あすわ就労支援センターを訪ねた。大館^{おほだて}嘉昭^{よしあき}施設長に会った。

「一般就労は毎年3〜4人程度です。これまでだと、のべ70人が就職しています。いまの若い人、障害のある人たちは失敗やトラブルは当然あります。それを繰り返し、やっと定着する。3、4回転職してやっと落ち着いたケースもあります。そのとき、彼らを送り出した私たち施設長の責任として、必ず支援するアフターケアを大切にしています」

なるほど。雇用する企業から信頼を得ているのは、ここがポイントなのかと思った。あすわ就労支援センターは20代、30代の110人が就労へ向け、自立、生活、実習、施設内就労、施設外就労、トライアル雇用などのステップを段階的に経験して一般就労までの訓練を受けている。

足羽ワークセンターと足羽サポートセンターがあり、ともにB型事業所を持つが、足羽ワークセンターは自立訓練（生活訓練）、足羽サポートセンターは就労移行支援が中心になる。

足羽ワークセンターの^{えみきよ}恵美浄文^{よみかみ}サービス管理責任者に聞いた。コンテナ内の荷物運搬、清掃、給食の厨房などの作業を経験し、働きたい、就職したいと意欲を見せる段階になれば、ハローワークでの



あすわ就労支援センター
大館嘉昭施設長



足羽サポートセンター

求職登録、仕事の相談をして実習企業を探す。本人の能力、適性、職場の人たちが仕事ができると認めれば、就職が実現する。

働くことへの適応とともに恵美さんが重要と考えているのは、働く基盤となる生活支援。グループホームが11カ所あり、約100人が居住しそこから施設へ通ったり通勤している。「ホームが自分の家なんだと、しつかり自覚してもらおうこと。家族との関係から自立すること、働いて自分で生きていくこと、社会人として地域で生活することにグループホームの意義がある」と恵美さんはいう。障害の程度、食事などの日常動作、社会適応能力などにより、生活支援員、世話人のサポート体制が6段階に分かれ、最終的には一般住宅や、公営住宅に2人で、願わくは異性と結婚という形で自立生活を旨とする人もいる。

足羽サポートセンターは福井の市街地・成和1丁目にあり、福井駅や各グループホームから朝夕送迎バスが運行されている。知的障害の人たちが施設外就労として同じ法人が運営する老人施設の清掃、施設内就労では百貨商品の検品、梱包などの作業をして月平均1万7千円の工賃を得ている。さらにステップアップとして、就労移行支援で一般就労を旨としていく。月1回、就労に必要な知識、マナー、能力向上への取組み方などの勉強会を開

催。事業所見学、求職登録、就職活動が行われる。

アフターケアのために

あすわ就労支援センターは2008年、あすわフレンズの会を結成した。一般就労したOB、OGの組織。秋吉グループ本部、伊与木工、福邦銀行などに勤務している人たち30人。「アフターケアの一環として組織しましたが、企業で働きたいと訓練に精出している人たちにはいい目標になるし、交流の場に参加させると刺激になる。支援する側からいえば、苦勞した部分です」と大館施設長。

アフターケアで重要な役割を果たしているのはジョブコーチ（職場適応援助者）。大館施設長らの経験では就労後のトラブルは1〜2年後が多い。ジョブコーチは障害者の支援、雇用側の支援、双方に働きかけ職場定着へ動き、雇用管理の方法を企業にアドバイスしてトラブルをおさめる。ジョブコーチ支援事業では支援期間は3カ月程度、フォローアップ期間は1年。このため、このあすわ就労支援センターは2009年から施設職員5人にジョブコーチ研修を受講させ、資格取得後はジョブコーチとして企業訪問し、障害者の勤務状況の確認、企業からの聞き取りを実施。変化があれば早めの支援を行い、集中支援が必要なら職業センター



写真右より、橋本裕樹サービス管理責任者、恵美浄文サービス管理責任者、渡辺順子課長

と連携しジョブコーチの再支援を行っている。

足羽サポートセンターの橋本裕樹サービス管理責任者は、「私も第1号職場適応援助者養成研修を受けました。私たちは数年間、障害者と施設内で過ごしていたので、個性・特性を知っており、そこがまた強みです。秋吉でお世話になっていく小林さんは、入社時から支援させていただきました。初月給の給料明細を見せてくれ、2人で喜びました。もうすつかり定着しています」と話す。

就職後のトラブルを支援して乗り越える徹底した定着支援の取組みが、企業と障害者の信頼を得て、いい結果が生まれている。